脳内カレシ。

りりまろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
脳内カレシ。

【Ｎコード】
Ｎ４２２７Ｒ

【作者名】
りりまろ

【あらすじ】
私には、生まれたときからずーっと一緒の男の子がいるんです・・・・・・・・・頭の中に＾＾：

鈍感天然娘・葉月と、それを守る苦労の絶えない彼・那津がおくる、ファンタジックラブコメディ―♪・・・という感じじゃよ。　Ｂｙ.例のあの人

私の中のアイツ。（前書き）

初・投稿です！
読んでみよっかな～と思ってくださりありがとうございます♪
頑張るので、見捨てないでくださいね！

私の中のアイツ。

‘バカだなぁ、葉月は。’

くっきりと頭の中に響き渡ったその呟きに、私は思わず今さっき返却されたばかりの数学の答案用紙をグシャ、と握りつぶしてしまった。

な、な、な・・・

“バカじゃないもんっ！ちょっと今回の問題が私に合ってなかっ・・・”

「ど、どうした？花坂（かさか）・・・テストぐっちゃぐちゃになってんぞ？」

ハッとして後ろを向くと、私の2年間の片思いの相手である麻倉（あさくら）海（かい）くんがビックリした顔で私を見ていた。

はわぁ、ビックリした顔もかっこいい・・・っじゃなくて！！

「あ、う、いやいやそのー・・・そう！意外な結果につい！ね！」

あたふたと答える私。そりゃそうです、悲惨な点数でバカにされたなんて言えませんからね！（いえいえ、『意外な結果』＝悪い、とは限りませんよ！逆かもしれませんからね！）

アホの子だと思われるなんてまっぴらごめんなんだから！

そんな私に、海くんは、ククッと笑って言った。

「あんま悪い点数だったからって、テストに当たるなよー！」

・・・ｏｒｚ。

＊＊＊

“もう！あんまりイキナリ話しかけてこないでよぉ！那津（なつ）がバカなんて言うからあんなことになったんだからぁー！”

家に帰って赤点者用課題プリントの問題を眺めながら、私は頭の中のアイツに文句を申し立てた。

・・・そう、間違って言ったわけではないのです。頭の中のアイツ、もう読んで字のごとく。

‘はぁ？お前の頭が残念なのは俺のせいじゃないんですけどー？’

くっ・・・憎たらしい奴め・・・！しかし口でやりあって勝てる相手ではないことはこの１７年間の人生で嫌というほど思い知っているので、結局は小学生のような文句を言うしかない。

“ばかぁ・・・バカナツぅ〜！”

‘だからぁ、バカはお前だろ？ほら、バカのための課題なんだからちゃんとやれよー。”

うう、痛いところをつくな・・・。
プリントを広げてシャーペンを握ったはいいものの、私はそれをながめるばかりでさっきから何も書いてはいない。
なぜならなぜなら・・・

“・・・だって一個もわからないんだもん・・・”

‘・・・まぁ、知ってたけどな・・・お前、さっきからずっと、“何コレーほんとに日本語？わっかんないよー！”って思い続けてるもんな・・・。’

“ちょっ！また私の心を読んだの！？やめてっていつも言ってんじゃん！プライバシーの侵害！”

‘はっ、頭の中での会話にプライバシーもへったくれもあるもんか。’

そうだけどそうだけどそうだけど・・・那津のはわからないのに私だけ筒抜けなのが腹立つんだァァァー！！

私は花坂（かさか）葉月（はづき）。そして私の頭の中でさっきからしゃべってるのが那津。

那津と私は生まれた時からずーっと一緒だ。なんでかはわからないけど、頭の中に『いる』。

いわゆる二重人格ってやつなのかな、やっぱ・・・。

でも、全然病気とかそんな風に感じたことなんて一回もない。むしろ、幼馴染的な。・・・にしては近すぎるか。

あと、やっかいなのが、私の思ってることが全部包み隠さずヤツに漏れてしまうことだ。

私たちの会話はいちおう『伝えようと思ったこと』を伝える形式、なはずなのだ、が。

実際、那津はそうなのだ、が。

私は筒抜けなのでございます。うううぅ～。

だって！普通心の中は自分だけの空間でしょ！？誰にも侵害されない唯一のテリトリーでしょぉ！？

そんな、思ってることを『分ける』なんてことできません！

那津に言わせると、‘葉月が不器用過ぎんだよ。’らしいですが・・・なんだろう、この不公平感。

あぁ、乙女の脳内が野郎に筒抜けなんて・・・！

まぁ・・・そのおかげで頭のいい那津にすぐ助けてもらえるっていうのもあるんだけど。

とにかく、ある意味究極一（近さの）の大切な幼馴染的存在なのだ。

‘おいコラ！那津様が特別に教えてやってんだから変なこと考えてないでちゃんと聞けバカ！’

・・・このえっらそーな態度がなければね！

私の中のアイツ。（後書き）

なにか問題がありましたら、遠慮なく（でも優しめに）どうぞ♪

体が欲しい。

最近、俺、那津はこの状態に限界を感じ始めている。

“ねぇー！那津！ここ、これが意味分かんないの！もっかい教えて？”

あぁ・・・ほんとにこいつは何も知らねえで・・・。

なぁにが、『幼馴染』だ！　なぁにが、『大切な存在』だ！

お前を17年間ずっと想い続けてるこっちの身にもなれってんだ！

まぁ、まったく気づいてないのも（身をもって）知ってるし、気づかれても気まずいしこんな鈍感天然やろーに感づかれるなんて末代までの恥なんじゃねーの！？っていう気持ちもあるんだけども！

“ねぇってばーぁ！”

ハァ・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

葉月とは生まれた時からずっと一緒だ。そりゃ、俺はあいつの頭ん中にいるんだから当たり前っちゃ当たり前。

そして葉月を守るためにずっと尽力してきた。

そう・・・あいつが危ない奴がゴロゴロいるような路地裏を“近道しよっかな～”なんて通ろうとしたときもすかさず適当なこと言って違う道行かせたし、『飴あげるからおいで・・・』という今どき誰がついてくんだよっていうようなセリフをハァハァ言いながら言ってきたオヤジに遭遇したあの小６のときも、アホみたいについて行きそうになりやがった葉月に適切な指示（例の男の弱点を蹴り上げろ！）を飛ばして守り切ったし、下心丸出しのクソヤローに『見せたいものあるからオレん家においでよ』なんて言われて鵜呑みにしてやがったあの中２の冬だって、俺がその通り言えっていった巧みな話術で心がポッキリ折れるまでやんわり且つグッサリ叩きのめしてやったんだからな！（おそらく、いや絶対、葉月は自分が言わされてることがそういう意図だったとは気づきもしなかっただろう・・・）

このへんで、あー、と思った方もいるだろうが・・・そう、葉月はいわゆる美少女ってやつだ。

しかも鈍感天然無防備ときてる。危険極まりないな、まったく。これだから俺が苦労するんだ。

で、ここで『限界』の話になっていくわけだ。
小さい頃はまだ守れていたが、しかし・・・そろそろ高2にもなってくると、な・・・頭の中からの言葉の指示だけでは、男たちの欲望の魔の手から葉月の貞操を守るのがキツくなり始めているとゆーか。

実際、もしいきなり問答無用で襲われたら守りようがねぇし・・・。

そんなわけで、俺は目下、『肉体がないゆえの問題』に直面しているというわけなのである。

“あ、那津。アレ、今日発売だっけ？”

今日も俺の苦労のおかげで無事学校を終え、家に帰っていた時に葉

月がふと思い出して俺に言った。

‘あぁ・・・そうだな、今日からだな、アレ。’

アレ。もちろん葉月の考えはダダ漏れだからというのもあるが、もうずっと一緒に過ごしているからこそそんな指示語でもヨユーでわかる。というのは俺のちょっとした喜びだったりする。

“だよね！うわぁ～帰りに寄ろう！楽しみだなぁ、あそこの新作ケーキ、いっつもおいしいんだもん♪”

アレっていうのは葉月のお気に入りのケーキ屋が毎月出す月替わり新作ケーキのことなのだ。通学路ではないが、ちょっと回り道したところにあるので、こういう風にたまに寄ったりできる。

葉月はそう決めると、るんるん気分で通常はまっすぐ帰る道を店のある通りに行くため右に曲がった。

「もしもし、お嬢さんたち。」

ふいに聞こえた声。
周りを見渡すと、建物と建物の間で「こっちこっち。」としているＴｈｅ占い師みたいな老婆がいた。

うわっ怪しすぎる・・・！

‘あれはダメだ、近づくなよ葉月。’
さっそく注意する。

“え！？あ、う、・・・そうだよね・・・”
興味津津だった葉月から、ちょっと残念、という気持ちが伝わってきたが、無視無視。

だが、そいつが言った次の一言でそうもいかなくなったのだった。

「そんな警戒してくださるな。用があるのは中の人なんじゃから。」

＊＊

“なーんか不思議なおばぁさんだったねぇ・・・結局占いしなかったし！あの恰好なのに！”

葉月が、占ってくれると思って期待したのにぃ～なんて言っているが、正直俺はそれどころではなかった。

だって！あのばばぁ・・・「体がご入り用なのでしょう？」って！

そうだ、あれは絶対俺に言っていた。葉月の中の俺に気づいて、しかも俺の目下悩みの種である問題まで・・・！

しかもしかもしかもしかも！葉月を近くに呼び寄せて、手をおでこにかざ

すから何をすんのかと思えば・・・

“わたくしにはあなたが見えているのじゃよ。那津くんというんだねぇ。困っているようじゃったから声をかけたんですよ。あ、これはこのお嬢さんには聞こえないように直接思念を飛ばしているから心配なさらず。”

‘！！！’

“時間もないので率直に言うが・・・君にぴったりの商品があるんじゃ。それが、これだよ。”

そういって、老婆は男の子の形の小さな人形をよこした。

こ、こんなものを頭の中に渡せたりすんだな・・・。

“まぁ、そういう類の人を相手にする商売ですからねぇ。”

‘え！？なん・・・ッ’

なんで読まれてんだ！？葉月じゃあるまいし・・・

目を白黒させる俺に、老婆はニヤッと笑って言ったのだった。

“経験が違うんじゃよ。ふぇっふぇっふぇっ。”

そして、渡されたのは何だったかというと。

“それは、想いをこめると魂の入る肉体を作りだしてくれるもの。まぁそれはプレゼント用のお試し版じゃから、効果は1時間なのじゃが。お嬢さんを守りたいいざというときに、『体が欲しい』と強く願えばいいだけじゃよ。”

・・・だ、そうだ。

もう何が何だかさっぱりだが・・・とりあえずスゲーもんをもらったようである。

あぁーっ！なんだかキツネに化かされた気分だ・・・！

しかも、本購入したくなったときのためにーとか言って連絡方法まで教えられたし！（思念の飛ばし方～とか言ってたな・・・ふ。）

ぐわー、もうどうしろってんだー！

“ちょっと！！さっきからずっと黙りこんでるけど、聞いてんの！？無視しないでよーバカナツぅー！”

頭を抱えるショート寸前の俺にそう言い放つ葉月。

ぶち。

‘うっせーーーーーーッ！！それどころじゃねぇーんだよ、バカ葉月！’

俺の苦労の日々は続くようだ。

体が欲しい。（後書き）

急展開でしょうか？
まぁいいよね～★

奇襲にやられる？（前書き）

また葉月ちゃん視点。基本交互で進んでいきそうです。

奇襲にやられる？

那津がおかしい・・・

家に帰って私がケーキを食べながらそのおいしさを熱く語っているのに、何も言ってくれない。

いつもなら、どんなことでもちゃんと相槌うってくれるのに。

やっぱり、あのおばあさんのこと考えてるのかな・・・。

まぁ確かに怪しげではあったけど・・・手かざされただけだしなぁ。特に何を言われたわけでもない。

変な人だったなぁ～、ぐらいしか思わないんだよね。

あの那津が気にかかってるのは心配だけど・・・那津ってちょっと深読みしすぎなとこもあるし！

いざとなっても私にはいつも那津がついてるんだから、大丈夫！

不安もなくなったところで、残りのケーキを楽しみましょー！と思ったら。

トゥルルル・・・

あ、電話！

ちょうど口に入れてしまったケーキを急いで飲み込み、鞄からケータイを取り出す。

誰だろう？　・・・て、えぇ！？海くん！？

「もひ・・もしもし！」

やば、ちょっと急ぎ過ぎた。

『ははは！噛んでんじゃん。大丈夫？』

電話から聞こえる声は、どうやらホンモノ！

うわぁ、またアホなことさらしてしまったァァ！じゃなくて！

「ななんで！？電話なんて今まで・・・」

『うん、初電話がこんなんで悪いんだけどさぁ。明日ヒマ？

約束してたやつがドタキャンしたらしくて・・・なんか一人足りないからだれか誘ってくれって頼まれちゃったんだよ。』

そうなんだ！さすが海くん優しい！頼られてる！

そして困ってる海くんをほっとけるわけがございません！

よくわかんかいけど海くんと土曜日に合えるチャンンスじゃーん！

「全然！いいよぉ。私明日はなんも予定ないし！大丈夫だよ。」

『ほんとか！？よかった～、ありがとな！花坂！」

電話から伝わる海くんのうれしそうな声・・・あ～幸せ！

『じゃ、明日の１１時に駅前の噴水のところな！』

「はーい。じゃぁまた明日！」

ふふふふ。顔がにやけるぅ。

楽しみだなぁ、何着てこうかなぁ。

‘おい。’

わくわくが抑えきれない私に、ふいにどす黒い雰囲気をまとった低く怖い声があびせられた。

“わぁ！な、那津か。どうしたの？そんな声出して。あ、考え事終わったんだ？”

‘お前・・・今のなんだ？’

“え？あぁ、そう！聞いてよ！今ね、なんと海くんから電話がかかってきたの～！！でね、明日なんかドタキャンした人の代わりに・・・”

‘どこに。何の代わりなんだ。’

間髪入れずになおも怖い声で言う那津。

“あれ？そういえば・・・何するんだろう？なんか何人かいるっぽい感じではあったけど・・・詳しくはわかん”

‘バカかてめぇッッ！！！！！！！’

あまりの気迫で怒鳴られ、びくっとする。

え、なんで！？なんかいけなかった？

‘くっそ！そんなん合コンに決まってんだろ気づけよバカやろう一人足りないとか大人数で行くとか絶対そうじゃねぇか！！’

そ、そうなの・・・？

てか、行ったことないから全くわからないんだけど・・・ダメなの？

あまりのことにセーブがきかないのか、めずらしく那津の考えすべてがこちらにも漏れ伝わってくる。

あ〝ーッ！！俺があのババァのことで悩んでいる間にまんまとやられやがって！ふざけんなアノヤローＨＲ委員だから連絡用にーとか言って聞いてきたからしょうがなく教えるのを許可したけどやっぱり偽もんにすべきだったか！つーか地位を利用して私用でかけてくるなんてセコイヤローだ！葉月に何かしやがったらただじゃおかねぇッ！俺が今まで必死で回避させてきたってのにまったくもう！一番やばいパターンに行きやすいシチュエーションじゃねぇかよッ！俺がついていながら一生の不覚…！くっそ、こんなときにあ〝ーもうッ！！

・・・・なんだかよくわかんないけど。

“ごめんね…？ちゃんと聞かないままオッケーしちゃって。でも、いつも、那津が一緒なんだから大丈夫だろうと思っちゃうの・・・・”

ピタッと那津の心の嵐が止んだ。

ゆ、ゆるしてくれたのかな・・・？

‘・・・・・まぁ、この俺様がついてんだからな。もちろんお前が安全でいられるようにするに決まってんだろ！’

うふふ、いつもの那津だぁ！

心強い言葉に、うれしさがこみ上げる。

‘けど！！ちゃんと俺の言うとおりにして、お前も気はつけるんだぞ！’

照れ隠しのように怒っていう那津。

“はぁい！頼りにしてまーす、ナツ様〜！”

安心してにこにこ顔でで明日の服を考え始めた私に、なぜか那津は苦虫を噛み潰したような顔をしていたのだった。

奇襲にやられる？（後書き）

那津、思わぬ奇襲にはまる。
葉月ちゃんは鈍感天然ですのでね。君の過保護も一因では？という気も…

強い願い。（前書き）

那津の心情は書きだしたら止まらなくなる！
暴走気味なノリをお楽しみください（笑）

強い願い。

翌日。

朝から俺は、葉月に着ていく服を替えさせたり、リップグロスをつけるのを思いとどまらせたりと様々な気苦労を余儀なくされた。

だかその甲斐あって、葉月の服装は、ぴったりしたスキニージーンズ（スカートなんて即却下）に、襟がつまったシフォンのブラウス（前かがみになったらどーすんだ）で、髪はハーフアップ（首筋を露出するなんてもってのほか）、という葉月がゴネない程度に抑えたものになっている。

葉月を丸めこむのなんてちょろいもんだ。

あんまり派手だと『海くん』にドン引きされるとか、気合入りすぎだとまた笑われるかもとか言って、そのあとで葉月にはこっちの方が似合うし、アイツもパンツスタイルの方が好きらしい（テキトー）とか言ってやれば、もうオッケーだ。

くっ…本当はブラウスだって綿のやつにしたかったけど…

下にちゃんとぴったりしたインナーを着るという約束でしぶしぶ透け感のあるシフォンを許可した。

「おー！花坂！」

駅前に近づいてくると、元凶のアイツに遭遇した。

「海くん！」

葉月も海に気づき、手を振りながら駆け寄る。
あいかわらず爽やか気どりの笑顔がむかつくヤツだ…。

「駅まで一緒に行こうぜ。」

「うん！…あ、そういえば昨日うっかり聞き忘れちゃってたんだけど、今日って何の集まりなの？」

だから、合コンだろ。俺の言葉を信じてねぇのか？
ふん、まぁ奴が言いにくそうに「ごめん、合コンなんだ。言うと来てくれないと思ったから…」とか言って葉月に幻滅されるっていうのもいいかもな・・・

だが、奴の答えは予期せぬものだった。

「あぁ…それが俺もあの電話のちょっと前に、ダチに来てくれ！って頼まれて…だからよく分からないんだ。
なんか、メシ食ってカラオケ行くらしいんだけど…誰がくんのかもわからないし。そんなもん知らないヤツと行って楽しいのか…何の集まりなんだろーな？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ？
コ、コイツ、本気で言ってんのか・・・？
食事→カラオケ、ときて、友達じゃないヤツと、っていうことまでわかっておいて？
合コンだということがわかってねぇ？
・・・・・・・・・・・・・・・・・そんなバカな！！！

「へぇ～そうだったんだ！うーん、なんかよくわかんないんだね、お互い。」

「だな。ごめんな、そんなもんに誘っちゃって。」

「ううん！役に立ててうれしいよ♪」

まさか、葉月だけではなかったとは。
麻倉　海・・・お前までもが天然野郎だったんだなッ！！

なおもとんちんかんな会話を続ける二人に、俺は頭がくらくらしてきた。

うん、まぁ・・・とりあえずコイツの警戒レベルは下げてもよさそう・・・か・・・？

よかった・・・のだろうか？

そんな俺の気も知らないで、海くんやっぱり私服もかっこいーぃ！
なんてうっとりしてる葉月に、今日一日の苦労が思いやられてため息が出そうな俺であった。

＊＊

「花坂　葉月です！よろしくお願いします！」

よろしくー！と盛り上げ役っぽいやつらが声を飛ばす。

俺たちが駅前に着くともう参加者はみんなそろっていたようで、すぐに近くのファミレスに入った。

そして今はそれぞれの自己紹介が終わったところである。

と、幹事っぽいやつが立ち上がって言った。

「じゃあ自己紹介も終わったところで・・・合コンはじめちゃいますかー！」

ガタガタッ

「「えぇッ！？！」」

案の定、葉月と海がびっくりして立ち上がった。

「おい、加藤！どういうこと・・・」
「はいはいはいはい、麻倉、ちょーっとこっちに来てくれるかなー？」

おそらく海にこの合コンに来てくれと頼んだという例のダチなのだろう、加藤と呼ばれた男が詰め寄ろうとした海を席から離れたところに連れて行った。
まぁ加藤とやらは初めからだます気だったんだな・・・どうやら海は爽やかでかっこいい、と学校でもモテてるようだし。

しかも見たところ、海と葉月はこの合コンの目玉ってとこだ。きっと加藤による策略だろう・・・適当にだまくらかした海に葉月を誘うようさりげなく誘導したに違いない。この腹黒さ、絶対そうだ。
加藤のカスヤロー！

つまり、何が起こるかというと・・・野郎どものターゲットが葉月に集中してしまう、ということなのだ。

「葉月ちゃんってかわいいねー！うちのガッコに来てほしいよ。あ、オレ〇〇高校なんだけど…え？金持ち学校じゃんって？いやぁ、まぁ親父が社長ってだけだよ～。」
「ぼく葉月ちゃんみたいな子めちゃめちゃタイプなんだ！どう？このあとどっか行かない？あ、ケータイ教えてよ！」

などなど。くそが、俺の葉月に気安くしゃべりかけんじゃねーよ！

葉月に指示して全部すげなく断らせながら、ちらりと海をうかがうと…やはり奴も予想通りの状況だった。

「きゃー、海くんサッカー部なんだぁ！今度応援行くからアド教えてよ～！」

「練習毎日たいへんなんでしょー？あ！私、料理得意だから今度お弁当つくってあげるね？てかこのあとウチおいでよぉ、手料理ごちそうするし～！」

おおおぅ・・・なんて肉食系なんだ・・・

心の中で同情を禁じ得ない俺だが、まぁ頑張れとしか言いようがないな。

そして視界の端には、海に群がる女のひとりに懸命に話しかけては無視されているドンマイな諸悪の根源・加藤の姿が見えたのだった。

合コンはつつがなく進み、もうカラオケも佳境を過ぎたころ。

葉月はトイレから部屋に帰る途中。

このまま何事もなく終われそうだな・・・

少しほっとしている俺だったが。それはすぐに裏切られることとなった。

「葉〜月ちゃん。」

廊下に立っていた男に呼び止められた。

こいつはたしか…○○高校に通ってるとか言ってた金持ちのボンボン、だったか。

取るに足らないヤツだと思ってたけど、部屋から抜け出して待ち伏せるなんてな。

軽くあしらってやろう、とヤツの目を見たとき・・・

‘・・・っ！　ヤバイ！葉月、すぐにコイツから離れろ！！’

本気の眼(め)だ・・・！これはちょっとマズイ・・・ッ！！

“え、え？う、ん、わかった・・・？”

戸惑う葉月だが、俺の忠告を聞きすぐ戻ろうとする。

「えっと・・・私お部屋に戻りますね？」

さっとヤツの横をすり抜けようとしたとき・・・

パシッ

「え・・・・？」

ボンボンが葉月の手首をつかんでいた。

「ダメだよ、葉月ちゃん・・・。ちょっとこの空き部屋でおしゃべりしたいんだ・・・。」

‘断固拒否しろ！！！！！’

激しい危機感が襲う。

「あ、のぉ・・・ごめんなさい、みんな待ってるし、普通に戻ってからお話しませんか・・・？とりあえず離してください。」

「ふふふ、わかってないなぁ。オレは、」

「きゃ・・・」

言葉を切ったボンボンは葉月の手をひっぱってグッと引き寄せ、耳元に口を寄せた。

「君とイイコトしたいな、って言ってんだよ？」

寒気がするようなセリフを囁くや否や、ヤツは葉月の体をぐいっと抱き込み、自分の体ごと空き部屋に押し込んだ。

「え、ちょ・・・やめ・・・離して！」

ここにきてようやくヤバさがわかったらしい葉月が暴れるが、やはり男の力には敵わない。

勢いのまま、部屋のソファにぼすっと押し倒されてしまう。

だぁーーッ！！！やばいやばいやばいッ！！

恐れていた事態が・・・！！！！！！！！

「いやっ！！誰か・・・ふぐぅッ」

「おっと。騒がないでよ。うれしいでしょ？このオレに気に入られたんだから・・・さ？」

“キモッ！！冗談は顔だけにしてよ！！！”

激しく同意！！ってそんな場合じゃねんだよぉぉ！！！

このままじゃ俺の葉月の純潔が・・・

・・・・・あ・・・・・

焦燥に駆られる思考で思い浮かんだのは、昨日のババァの言葉。

思い出したらパッと現れた、あのとき渡された男の子の人形。

くっ！ここで使うっきゃねえ！！

正直すげえ怪しいし不安だが・・・もううだうだ悩める状況じゃねぇし！！！

た、確か、強く願えばいいんだよな・・・！？

頼む！！どうしかしてくれ！！

ぎゅうっと人形に力を込めて叫ぶ。

俺は葉月を守れるカラダが欲しいッ！！！！！！！！！！

強い願い。（後書き）

つ、ついに・・・！！

ヒーロー参上！（前書き）

※イラスト注意

ヒーロー参上！

「んぅー！うぐっ、ん゛――――っ！！」

「へっへっへ・・・さぁ、お楽しみの時間だよ～♪」

どうしようどうしようどうしよう！

口はふさがれて叫べないし、力では勝てない。

このままじゃ、こんなヤツに・・・

そんなのやだ・・・っ！

思わず涙がにじんでくる。

「あれ？泣いちゃた？うれし泣きかよー。」

そんなわけないだろー！

冗談は顔だけにしてよッ！（二回目）

「泣くなって。これからたっぷり可愛がってあげるから・・・」

そう言って、顔を近付けてくる。

やだやだやだぁー！！

「んんんんん゛――――――！！！」

もう無理だ、という気持ちと、絶対いやだ、という気持ちがごちゃまぜで。
とっさに頭に浮かんだ心の叫び。

助けて！！！那津・・・！！！！

バ――――――――――――ンッッ！！

「俺の葉月に触んじゃねぇーッ！！」

もの凄い音をたててドアが蹴破られたと同時に、男が部屋に飛び込んできた。

「な・・・なんだお前・・・！？」

私の上にのしかかっていた顔面冗談男もびっくりして顔を上げ、闖入者に問う。

しかし男はこちらを見るなり、カッと目を見開いて激しい怒りのオーラを爆発させた。

「何やってんだーー！！さっさと葉月の上から下りろ！！！」
ドゴッ、という音とともに私の上からヤツが吹っ飛んだ。
殴り飛ばしてくれたようだ。
「けほっ、ごほ・・・」
「！？おい、大丈夫か！？」
咽(むせ)る私に、男が心配そうに駆け寄ってくる。
「だ、だい、じょうぶ・・・です。口ふさがれてただけだから・・・」
私がそういうと、彼は、はぁー・・・と、心底ほっとしたように息を吐いた。
「よかった・・・ホントよかった、間に合って・・・」

そうだ、私、助かったんだ・・・。
よかった・・・怖かったよぉー！！
私もほっとしたら、涙がどうしようもなくこみ上げてくる。
「う、うぅ、く、うぅぅ～っ」
「わ！う、わ、な、泣くな・・・もう、大丈夫だから・・・。」
ぽろぽろと泣きだした私に、焦る彼。
悪いなぁとは思うけど、止められない。

「ひ、く・・ご、ごめ・・なさ・・」

しゃくりあげながら謝ろうとしたとき、ふいに暖かいものに包まれた。

ぎゅ、と背中に感じるたくましい腕。頬に押しつけられた堅い胸板。

だ、だだだだ抱きしめられてる・・・！？

「あああああの・・・」

「怖かったよな・・・もう、大丈夫。俺が居る。辛かったら泣け。俺の前で我慢なんかするな。わかってるから・・・ちゃんと全部受け止めてやるから・・・。」

優しい言葉が降ってくる。

パニックになっていた気持ちが落ち着き、癒されていくように感じた。

知らない男の人に抱きしめられてる、のに・・・私、すごく、安心してる・・・？

泣きやんだのを感じたのか、彼は私を少し離し、顔を覗き込んできた。

「もう大丈夫・・・だな！」

そう言って、ニッ、と笑う彼に、どくん、と胸が脈を打つ。

よく見れてなかったけど、改めて見ると・・・この人めちゃくちゃカッコイイ・・・！！

「あの、助けていただいて、本当にありがとうございました・・・」

ぽーっとなりながらも、なんとかお礼を言う。

「なんだぁ？他人行儀だな。昔から葉月のピンチを助けてきたじゃねぇか。」

「え？どういう・・・？てか、何で私の名前・・・？」

そういえば、最初から葉月って呼んでた・・・

「は？だってそりゃお前・・・って、あ゛ー、そっか・・・今はカラダが・・・そりゃ見たことないもんな、俺だってわかんねーし葉月にもわかるはずがないよな・・・」

なんだか一人で納得したり落胆したりぶつぶつし始めた彼を横目に、ようやく冷静を取り戻してきた私は、ふと重大なあることに気付いた。

そういえば・・・！！

“那津！！静かすぎて忘れちゃったじゃん！どうして何もしゃべらないの！？”

こんな状態だったから、何も話し掛けてこなかった那津の存在が頭の隅に追いやられていた。

“ねぇ！どうしたの？てゆーかひどいよー！何か言ってくれてもよかったじゃん！すっごい怖かったのに・・・”

そうだよ、那津がなんか言ってくれてたら私だってこんなに・・・・・・て。

“・・・那津？”

応答がない。

“那津！？ねぇ那津、聞えてる？どうしたの？返事して！”

それでも何も聞こえてこない。

どんな時でも聞えてた、頼れる大切な幼馴染の、たまに憎たらしいあのコエが。

“那津・・・？那津・・・那津！！”

こんなこと今までなかった。

その思いが、落ち着きを取り戻していた私の心を再び暗い谷底に突き落とす。

「っう・・・くぅ・・・うぇ・・・」

ようやく止まっていた涙まで溢れてくる。

「うわ！？ど、どうしたんだ葉月！？また怖くなったのか！？」

ぶつぶつから覚醒した彼が、またうろたえている。
でももう悪いとか思ってる余裕なんかなかった。
だって・・・だって・・・

「うわーん！那津がいなくなっちゃったよぉーー！」

言葉にしたらよけい怖くなって、私は声を上げて泣き始めた。

「うぇぇ！？俺が！？ってあぁ！そういうこと・・・お、落ち着け葉月！泣きやめ！とりあえず泣きやんでくれー！」

なんか言ってるけど、もう何も考えられなくて、頭に入ってこない。

「ちょ、泣くな・・・とりあえず泣きやめ、な・・・？」

「うく、ひっ、うぅー、那津ぅ～・・・うぇ、く、うぅ～っ」

何を言っても泣きやまない私に、しばらくオロオロしていた彼だったが、ついにぐ、と決意したように叫んだ。

「あぁーー！もう！！」

ちゅ・・・

いきなり、視界が暗くなって、唇に感じる柔らかい熱。
見えるのは、彼のきれいな長いまつげだけ。

え。

コレって・・・キ・・・

状況が完全にキャパシティーオーバーで、思わずフリーズする。

もちろん涙も一瞬で引っ込んだ。

そんな私を知ってか知らずか、ようやく顔を離した彼は、さらに私を混乱の渦へ突き落す一言をのたまったのだった。

「俺が、那津だ。」

>i2025 1 — 2749<

ヒーロー参上！（後書き）

やっぱりヒーローはヒロインのピンチに駆けつけるもんですよね！

震災で辛い思いをしている方も多いと思います。
本当に、早く状況が良くなることを祈るばかりです。
小さなことしかできませんが、できることをやっていきたいと思っています。

男、那津。

「俺が、那津だ。」

「え・・・えええぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！？？」

響き渡る葉月の大絶叫。

「なんっ・・・えっ！？いま、キ・・・えぇ！？だっ・・・那っ・・・えぇぇ！？」

葉月はあまりのことに言葉が出ず、口をぱくぱくさせている。

まぁ、当然の反応だよな。

・・・

てゆーか！俺いまどさくさにまぎれて葉月にキスし・・・いやいや、あれはとりあえず葉月を泣きやませるためで！て、そんなんでいいのかいやダメだろ何考えてたんだ俺！？そもそもこんな訳わからん状況のせいで・・・てかホントにあの人形が効くなんて思わな・・・いやいや、効かなきゃやばかったから本当に効いてよかったんだけど！心底よかったんだけども！！

あんな怪しげな占いババァから押し付けられたあんな胡散臭さの塊みたいな人形がホントに効果を発するなんて思わなくてもう訳わからなくて夢中で・・・て何言ってんだ俺!?

「え、那、津?本当に那津なの・・・!?どういう・・・!?何で那津が私の中から出てきてるの・・・!?」

ようやくしゃべれるようになったらしい葉月の言葉にはっとした。

お、おぉ、そうだった・・・
とにもかくにもまずは葉月に全部説明しなきゃな・・・

そうして俺は、事の顛末を話し始めたのだった。

＊＊

「へ・・・へぇ～～～～！！あのおばあさん・・・すっごい人だったんだねぇ～～～～！！」

全てを聞き終わった葉月が目をきらっきらさせながら言った。

もしかして魔女！？キャー！すごい私ホンモノの魔女に会っちゃった！？すごい！私魔力あるのかもー！！

・・・なんていう心の声が聞こえてきそうだ。（もちろん今は聞こえないが、葉月の考えることくらい手に取るようにわかる。だてに１６年間ずっと中でダダ漏れの葉月と過ごしてきたわけじゃない。）

「・・・まぁ、すごい、というほかないな。・・・魔女かどうかは知らねーが。」

そう言ってやると、ギクッとして「なんでわかったんだろ？」みたいな顔してる葉月。ふ、やっぱりな。

でも、魔法としか思えないぐらい非現実なことは確かだ。まぁそれを言い出したら俺の存在も非現実的なんだけど。

「てゆーかさぁ！！」

いきなり葉月が大声をだした。
そしてそこで言葉を切って、なぜかじぃ…、とこっちを見つめている。

ん？なんだ・・・？

しばらく待っても葉月は何も言わず俺を見つめ続けている。

「な、んだよ・・・？」

さすがに気まずくてそう言ってみたが、

「へ！？あ、いや・・・うん・・・。」

答えになってない答えが返ってきただけで、葉月はまだぼぉっとこっちを見つめたまま。

さっきは丸わかりだったのに今は何考えてんのかまったくわからん！
なんか落ち着かないんですけど・・・。
しかも心なしか葉月の頬が赤いような・・・ん？赤い・・・？

そこで俺はハッとして言った。
「おい、熱でもあるんじゃないのか！？顔は赤いし発言はぼんやりしてるし・・・！」
そう言って葉月の額に手を伸ばす。

びくっ
「きゃ・・・」

「え・・・？」
予想外の反応。葉月が俺の伸ばした手を後ろへ避けたのだ・・・うわ、地味にすっげ傷つく・・・
顔に出ていたのだろうか、そんな俺を見て葉月がはっとして慌てて言った。
「ちっ、違うの！！嫌だったとかじゃなくて！その・・・えーと・・・ね・・・」

・・・？

「那津が！・・・カッコよすぎて恥ずかしかったのッ！！！」

「・・・・・えっ！？」

「しかも、よく考えたらさっき・・・・・」
キスしたし、と消え入りそうな声で呟いたあと、葉月の顔はさらに、かぁぁ、と真っ赤になった。

そして俺も、かぁぁ、と瞬時に顔に熱が集まってきたのを感じた。

「え、う、あ・・・あれは・・・あー・・・泣き、止ませようと・・・おもっ・・・」

「・・・うん。わかってる・・・」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

うわぁぁぁ！！はっず！！
なんっだコノ羞恥ぷれいッ！！

「・・・那津。さっきはごめんね。もう避けないから・・・はいっ！どうぞっ・・・おでこ・・・触って？」

沈黙を破ってくれたのはいいけどなんじゃそりゃぁぁぁ！！！「触って？」って！
なんつーこと言いやがるんだぁぁぁ！！

ておい！なぜそこで目をつぶるーーーーっ！！？？

どくどく、と激しく脈打つのがわかる俺の心臓。

そ、そうだよな、目の前に生まれた時からずっと思い続けてきた女がいて、そして今はその想いを伝えられる体もあるんだもんな・・・

よ、よし・・・！！

ここで行かなきゃ男が廃る！っぽい！

ごくっ、と生唾を飲む。

据え膳食わぬはなんとやら、だーー！！！

男、那津。（後書き）

こっから先は男視点では無理そうだったので・・・（笑

次回、１５Ｒです！

怖いわけない。（前書き）

はい、途中からＲ１５です。
満たない人、または嫌いな人はご注意を。

怖いわけない。

「てゆーかさぁ！！」

じぃ…っと見つめてみる。

那津、カッコイイよね！って軽く言うつもりだった。のに。

ふわぁ・・・カッコイイ～・・・

「な、んだよ・・・？」

「へ！？あ、いや・・・うん・・・」

きまり悪そうな那津に言われて、言葉を切ったまま見とれ続けていたことに気付いた。

わ、どうしよう。見つめすぎたよね！？怪しまれてるよね！？

しかし、那津は変な勘違いをしたようで。

「おい、熱でもあるんじゃないのか！？顔は赤いし発言はぼんやりしてるし・・・！」

そう言って、私に手を伸ばしてきたのだ。

びくっ
「きゃ・・・」
どうしようどうしようばっかり考えていた私は、思わぬ不意打ちに思わず後ろへ仰け反ってその手を避けてしまった。

那津の顔に、がぁーん！という表情が浮かぶ。
あぁっ！ゴメン那津！

「ちっ、違うの！！嫌だったとかじゃなくて！その・・・えーと・・・ね・・・」
？という顔の那津。

だから！あのー、そのー、えーっと・・・もぉぉーーーー！！！

「那津が！・・・カッコよすぎて恥ずかしかったのッ！！！」

言っ・・・ちゃったぁーーーーー！！

「・・・・・えっ！？」

那津はびっくりしてピシッと固まったみたいになっている。

それに！それにさぁ！！

「しかも、よく考えたらさっき・・・・・」

キスしたし・・・

聞こえたかどうかわからないくらいの声しか出なかった。

だって、恥ずかしい！！

なんかうやむやになってたけど私のファーストキスなんだからね！？

那津だって知ってるはずなのに！！

そんなことを考えると、頬が、かぁぁ、と熱くなる。

「え、う、あ・・・あれは・・・あー・・・泣き、止ませようと・・・おもっ・・・」

そう言う那津の頬も赤くなっていた。

「・・・うん。わかってる・・・」

う・・・わーーー!!何その反応ーー!!
わかってるよ!泣きやませるためなんて!
でもそうじゃなくて!何その反応ーー!!カッコイイ人が頬を染めるとこんなに色っぽいのーーー!?

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

どどど、どうしたらいいのこの沈黙っ！！
気まずいよー！何かしゃべることしゃべること・・・あ！！

「・・・那津。さっきはごめんね。もう避けないから・・・はいっ！どうぞっ・・・おでこ・・・触って？」

そうだよ！さっきつい避けちゃったから、きっと熱あるかもしれないって心配してるんだよね！
熱のせいではないんだけど、那津の心配を取り除かないといけないし！

でも、どうぞって言っちゃってるのになんだけど、やっぱり恥ずかしいな・・・

あ、そうだ、目をつむっとけばいいんだ！

これくらいいいよね。

そして私は那津の手がおでこに触れるのを緊張の面持ちで待っていた。

のに。

ぐいっ

「んぅ・・・・!?」

訪れたのは那津の手ではなく熱い唇で。

気付いたらまた那津の腕の中で。

「ふ・・・・ぅ!?んんっ・・・・!?」

な、なんでなんでなんでーーー!?

「は・・・・っ」

那津から漏れる悩ましげな吐息。

「ん、ふ・・・う・・・はぁ・・・っ」

さっきの、ちゅ、っていうキスなんかとは全然違う。
長くて、濃くて、激しくて、息がしづらくて苦しくて・・・でも、甘くて。

「ふぁ・・・！んん、んぅ・・・は、んっ・・・」

力が入らなくなり、くた、とした私の体をささえているのは、那津のたくましい腕だけ。

すごく長く感じたキスが終わり、那津が言った。

「・・・怖いか？」

とろけきった頭でその言葉を受け取る。

一瞬、なんで？と思ったけど。

あぁ。そっか。
さっき無理やり襲われかけた私を、心配してくれてるんだね。

やっぱり、那津は優しいなぁ・・・

「ううん、怖いわけない・・・だって、私の那津だもん・・・」

とろん、としてふわふわな状態で、あまりうまく言葉にできなかったけど。
このうれしい気持ち、伝わってたらいいな。

顔が上手く動かせなくて、ふにゃ、とほほ笑んだ。

「っ・・・・・!!」

ぼぼぼ、と赤くなる那津の顔。

「?どうし・・・ふぅんっ」

どうしたのって聞こうとした時、また始まったキス。

しかしさっきと違うのは、さっきは唇を舐めるだけだった那津の舌が、ぬるっ、と口内に侵入してきたことだった。

「んぅ!?んぁ、はぁ・・・っ、那、津ぅ・・・や、ぁ・・・ふぁ、ぅんん・・・っ」

「はぁ・・・っ・・・っとに、お前は・・・っ!」

あんま煽るな、と吐息とともに吐き出された掠れた那津の声が、さらに私を熱くさせた。

「ぅあ・・・ふぅ、んっ、んんぅ・・・っ」

しかし、永遠に続くように思えた熱いキスは、いきなり終わりを迎えた。

ぼふんっ

突然、そんな音とともに那津が消えたのだ。
私を捕えて離さなかった熱い舌も、腰をがっしり支えていた腕も、
頬を優しく撫でていた手のひらも、すべて。

「え・・・！？那、津・・・！？」

一瞬でなくなってしまったぬくもりがさみしくて呼んだ声が、ひとりになった部屋に冷たく響く。

「那津・・・っ・・・どこ・・・！？どこにいっちゃったの・・・！？」

返事がなくて、泣く寸前。

「那津ぅ・・・・う、うぅ・・・・」

‘・・・いってぇぇぇ！！’

え！！??

それは、・・・・・いつもの場所から聞こえてきた。

‘なんだぁ！？一瞬頭が割れるかと思った・・・！副作用か？・・・・・・て、あれ？’

これって・・・・・・・

‘戻っ・・・て、る・・・？’

那津の体が消え、声が聞こえるのは、私の中から。

そう、……いつもの場所。

‘・・・あ。そういや、お試し版だから効果は1時間、とかなんとか言ってたっ・・・け・・・’

あ、あは、あはは・・・

那津の渇いた笑い。

“はは、は・・・そう、なんだ・・・”

なんだか安心したような、残念なような・・・って残念!?

そっ・・・あのつ、続きが、なんてうわぁぁぁぁーーー何考えてんのダメダメダメーー!!!

今改めて考えてみたら、何やってんの何言ってんの私ったらもぉーーーー!!!

てゆーか今考えてるこれも全部那津に聞こえてるんだったんじゃなかったっけヤバいよーー!!

そこに思いいたって那津に意識を集中してみたら、那津は那津でパニクって、うわ俺なんてことしてたんだ葉月初めてなのにてかせっかくのあんな・・・うあーー!!なんて那津にはめずらしくダダ漏

れ状態で、こっちのことなんて聞いてる余裕がなさそうな様子だったので一安心。

でもこのままだとあの続きのことばっかり考えてしまいそうだったから、私は那津に聞かれる前に意識を逸らせるように強引に締めることにした。

“那津ッ！！！！”

‘うおぁっ！？な、なんだよ・・・！？’

すぅ、はぁ。

“・・・助けてくれて、ありがとね！！！”

よし！言った！！

‘・・・おぅ。’

しばらくの間のあと、聞こえた照れくさそうな那津の声。

うん！！やっぱりこうじゃなくっちゃね！！

かくして、那津と葉月のある意味初対面は幕を閉じましたとさ。

怖いわけない。（後書き）

とりあえず一区切り？
まだ続ける予定ですが、展開は未知数です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4227r/

脳内カレシ。

2011年4月2日12時01分発行